



2003年 12月15日発行(隔月刊)



# う 羽 化 か

2003年12月  
第 4 1 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
 〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
 発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
 編集責任者 宇田川 幸 子



## 目 次

漢点字講習用テキスト (初級編 第1回-4)	・ ・ ・ ・ ・ I
連載「点字から識字までの距離」(38) (山内 薫)	・ ・ ・ ・ ・ 1
酔夢亭読書日 (安田 章)	・ ・ ・ ・ ・ 4
点字の読みづらさと漢点字の触読について (22)	・ ・ ・ ・ ・ 7
漢文のページ	・ ・ ・ ・ ・ 13
ご報告とご案内	・ ・ ・ ・ ・ 15
平野久美子と短歌鑑賞	・ ・ ・ ・ ・ 19

点字から識字までの  
距離 (38)  
(墨田区立緑図書館)  
山内 薫



漢字―不可避の他者

「漢字は、それなくしては日本語という自己が存立し得ない他者である。」という論旨で展開される『漢字論―不可避の他者』（子安宣邦、岩波書店、二〇〇三）という本を読んだ。日本は中国の文字である漢字をどのように受容してきたのか、現在までの様

々な考えを紹介して興味つきない。

著者は台湾で開催されたあるシンポジウムの報告論文を予め提出するために中国語への翻訳を依頼した。ところが論文中のキーとなる概念用語が予想とはかなり違う異なる言葉で翻訳されていることに困惑する。

それは論文のタイトルにも使われている「表象」であったり、「自明性」であったりした。これらの言葉は中国語由来の漢語であり、漢和辞典の中にも存在しており、当然中国語文にも使



用可能だと思いきんでいた著者は、この問題に關する討論の中で、「表象」や「自明性」という言葉は、実は日本語への「representation」や「self-evidence」という欧米語の翻訳語だということに改めて認識させられることとなった。

日本語から中国語への翻訳は、日本語から英語への翻訳と本質的に変わらないにもかかわらず、両言語の漢字と漢語語彙の共有が双方の他言語性を曖昧にできてしまっている。それは中国語文である漢文を訓読しながら、その読みが日本語への翻訳であることに気付かずにきたことと表裏をなしているという。

日本における漢字・漢文を表記文字・表記技法とした書記言語の成立は、日本の律令国家の成立と同時期であり、その中で『古事記』や『日本書紀』も成立した。

『古事記』が漢字漢文表記からなるテキストであるにもかかわらず、本居宣長はそのテキストから古語である「やまとことば」を訓み出せると信じて膨大な『古事記伝』を著した。それは、本来口承の内なる言語である「やまとことば」を話す民族が存在し、そこに異なる国から漢字・漢文が導入され、それを表記手段として「やまとこと

「ば」は記述された、という漢字は「仮字」であり、侵入者であるという認識である。

例えばこの本の各章のはじめに引用されている言葉に次のようなものがある。

「シナの文字は日本のことばにはあてはまらない、日本のことばとシナの文字とは性格のちがふものである、……。日本人がすぐれた文化をもつこと、従つてまた日本の文化をますます進めてゆくことでありますが、それについて大きな妨げになるものは、シナの文字を日本人がつかふことではありません。」（津田左右吉『日本文芸の研究』）  
また、ごく最近の国語学のテキストでも次のように記述されている。

「文字を持たなかつた日本語は、中国から伝えられた漢字によって書記活動が始まった。このように古代から、文字をはじめ、漢字音、漢語の借用など、中国語の影響を受けてきたが、それらを取り除くことによって、本来の日本語の姿を描くことができる」（『国語学概論』白藤禮幸・杉浦克己 放送大学教材、放送大学教育振興会、一九九八）

「漢語は外来語たるに相違なくして純粹の国語として取り扱はるべきものにあらざるや論をまた

ず」（山田孝雄）

本居宣長の『古事記伝』が及ぼした漢字観はこうして後世にまで決定的な影響を及ぼしている。

そこで、提起されるのが「古事

記はよめるか」という問いである。この問題提起は亀井孝によって投げられた。「もとより、漢字は、いはゆる表意文字である。したがつて、それを表音的につかふならば、それは、所詮、漢字としては変則的なたつかひかたである。かう感ずるのが漢字に対するただしい感覚である。いはば、漢字の要求するこの感覚の根づよさは、もし、漢字文化といふことばをつかふなら、漢字文化にともなふ宿命である。」（「古事記はよめるか―散文の部分における字訓およびいはゆる訓読の問題」『古事記大成』三「言語文字編」平凡社 一九五七）

ここで「よむ」とはヨム（音読する）ことであり、訓む（訓読する）ことであり、また読む（読解する）ことでもある。『古事記』テキストはこの三重の意味で「よむ」ことの対象としてあった。『古事記』がよめるかという亀井の問いは、このそれぞれの「よむ」ことの位相が『古事



記』テキストとの関わりで問われることを意味している。「よむ」というかな表記はこの三層の意味でのよむ行為にかかわるものとして用いられている。」（著者、子安宣邦の注）

そして亀井はこう結論づける。

「一体、「訓ヲ以テ録」した散文の部分を、韻文のやうに表現の細部にいたるまで、一定の、このヨミかた以外ではいけないとうふかたちでヨムことをヤスマロは要求してゐたらうか。それを要求しなかつたからこそ、歌謡の部分だけを、あのやうなかたちで書きのこしたものであらう。しかし、それなら、古事記は、よめないか。いなー。それは、完全なかたちではヨメない。しかし、訓で書いてあるからには、よめる。すなわち、ヨメなくてもよめるかきかたの方が、有意義—*pertinence*—である、すくなくとも、ヤスマロの考へとしては、判断せられたにちがひない。」

したがって宣長の「古訓古事記とは、じつは新訓古事記にほかならぬ。そして、その本質において、以降は、みな、その亜流である。」（亀井孝）ということになる。宣長らが想定する口誦の固有言語やまことばにとって漢字はまず表記記号としての、次に異言語中国語の表記文字として

の二重の意味での他者性を帯びている。そしてその漢字によって書記化された言語テキストは口誦言語の二重の意味における喪失の上に成立する。

そして著者は「漢文体の和文体への解釈的な変容としての訓読化作業を通してはじめて統辞法的体系性をもった言語すなわち日本語文（和文）は成立するのである。」「日本語文（和文）とは書記言語・日本語である。書記言語・日本語とはしたがって漢字・漢文からなる書記テキストの訓読という読解作業を介してはじめて成立する言語である」という。

「漢字は不可避の他者である」「あらゆる自然言語に他言語を前提にしない純粹な自言語などはありません。（中略）漢字とは排他的に自己を生み出すための異質的他者でもなければ、受容者の自言語意識が負い続けねばならないトラウマとしての異質的他者でもない。それは日本語の成立と展開にとつて避けることのできない他者である。」（「あとがき」にかえて）より）

日本語の表記にとつて漢字というものが持っている意味や漢字の負っている問題についていろいろと考えさせられる本でした。

「私（岡田）の古い友人である安田さんから、ご寄稿いただきました。  
〈酔夢亭〉は、安田さんの字（あざな）です。」



## 孫子 その一

勝ち組負け組というちよつといやな感じの言葉が世間に流布している。幼稚で劣悪な言葉が流行るものだとは思いますが、これからの日本社会は、一対九の割合で勝ち組と負け組に分かれていくのだそうである。

似たような言葉に強者弱者というものがある。こちらあまり感じの良い言葉ではないが、勝ち組負け組というのよりはましな感じがする。

弱者は救済されるが、負け組はせいぜい敗者復

活のチャンスが与えられるぐらいである。チャンスは与えられるが、勝つか負けるかはあくまで本人次第である。浮かぶ浮かばないは自己責任である。本人次第、自己責任、ああ、これがうまくいけば苦労は無いのである。

一割の勝ち組にはいるため、子供の頃からしのぎを削り、知識を詰め込み、ストレスをため込んで人生を生きるのも良いだろうけど、勝ちを放棄する生き



方もまたオツな生き方ではなかるうか。一割にはいるということは通信簿で言えば、オール五を取るようにあるので、それもずつととり続けなければならぬ。落ち込みつぱなし、沈みつぱなしはいかない。落ち込みつぱなし、沈みつぱなしはいかないのである。アルコール依存になるなんてことはもつてのほかであり、趣味が競馬やパチンコなどという御仁は一割にはいろいろなどはゆめゆめ思わないことだ。

さて、唐突であるが、孫子である。孫子といえは兵法。孫子の兵法の前提は、「戦わずして勝

つ」ことであり、「勝算なきは戦わず」であるという。

毛沢東もナポレオンも武田信玄も孫子を研究したという。われらは勝ち組にはなれないとしても、勝ちを放棄したわけではない。それに人間の自然な心理としては負けるより勝つ方が気分が良いのではないか。

そんなわけで孫子を読んで、孫子の語るところを頼りにして自分なりにいくさとは何か、いくさに勝つにはどうしたらいいかを考えてみることにした。もちろん、いくさというものを国と国との戦争に限定するのではなく、人間社会を生きていく上での困難との戦いとみることもできるわけである。或いは経営戦略と捉えることもできる。

「兵とは詭道なり。」（計篇）、「兵は詐をもつて立ち、」（軍争篇）と孫子は言う。戦いは敵を欺くことであり、敵の裏をかくことである。詭道の詭は詭弁の詭であり、詐は詐欺の詐である。

「能力があっても無能力を装い、利にさといものには利で誘い、強いものは避けて通り、謙虚なものには驕りたかぶらせ、安逸にふけているもの



は疲れさせ、団結しているものは分裂させる。そして、守りの手薄なところを攻め、敵の不意を打つ。」

しかし、能力があるとしてもひけらかしたくなるのが凡人である。それをぐっと押さえて無能の人になるというのはなかなかのものだ。才気煥発すぎると人の反発を買いやすく、足を引つ張られやすい。策士、策におぼれ、カッパは河に流される。

もつとも詭道や詐を戦争以外の平時一般社会でへたに用いると刑法に触れる（詐欺罪 十年以下の懲役に処せられる）ことがあるので、人を騙すときには注意が必要である。孫子のせいにしても相手にしてもらえない。生兵法は怪我のもとである。

「算多きは勝ち、算少なきは勝たず。而るをいわんや算なきに於いてをや。」（計篇）

勝つ条件が多ければ勝ち、少なければ勝てない。ましてや勝つ条件が全くないのに勝つかもしれないなどと期待してもムダである。当たり前みたいであるが、この部分を読むと、ギャンブルにはまっている人を思い起こしてしまう。ギャンブルに勝つということは正に算少なき、と言えるの

ではないか。勝ち目がほとんどないのに、たまに大勝するものだから、その快感を忘れられずにギャンブル依存症になるものが増えているらしい。筆者もパチンコ好きである。依存症については別途研究したいと思っている。

・谷岡一郎「ギャンブルフィーバー」

(中公新書)

・田辺等「ギャンブル依存症」

(生活人新書)

「兵には拙速を聞かぬも、未だ

巧久を睹(み)ざるなり。」



(作戦篇) いくさは拙くとも早く切り上げることが肝要である。

「兵は勝つことを貴ぶも、久しきを貴ばず。」

(作戦篇)

長期戦になって国に利益があつたためしはない。戦争が長引けば、兵士は疲れ、銳気は挫かれ、国家財政ははなはだしく損なわれ、国民は窮乏し他国につけ込まれる隙を与えてしまう。現在進行形のイラク戦争にベトナム戦争の悪夢を重ねる人はきつと多いはず。

「用兵の法は、国を全うするを上と為し、国を破るはこれに次ぐ。」(謀攻篇)

孫先生はいう。敵国は痛めつけずに降伏させるのが上策で、打ち破るやり方はそれに劣る。ふむ。そして、

「百戦百勝は善の善なる者に非ざるなり。戦わずして人の兵を屈するは善の善なる者なり。」(謀攻篇)となる。戦わないで、敵兵を屈服させることがどのような可能であるか。

「上兵は謀を伐つ。」敵の陰謀を陰謀のうちに打ち破る。こういうことは日本はヘタである。○○のイギリスあたりが得意そうである。諜報活動で敵国の内部崩壊を画策する。

「彼を知り己を知れば、百戦して殆(あや)うからず。彼を知らずして己を知れば、一勝一負す。彼を知らず己を知らざれば、戦う毎に必ず殆(あや)うし」(謀攻篇)

今回、孫子について書くに当たって参考、引用している文献は以下の通りです。

「新訂 孫子」金谷治訳注 岩波文庫

「孫子」町田三郎訳 中公文庫

「孫子を読む」浅野裕一 講談社現代新書

「ビジネスマンの孫子の兵法」二見道夫

三笠書房

「孫子の兵法がわかる本」 守屋洋 三笠書房

「新釈 孫子」 武岡淳彦 P.E.P.文庫

以下次号



## 点字の読みつづきと

## 漢点字の触読について (二十三)

横浜漢点字羽化の会

代表 岡田 健嗣

## 九 MULTI SENSE READINGS

### 視覚障害者と読書 (私見)

「養老」日本語の特性として、音じやない書き言葉という問題があつて、根本的な問題は音訓な

んです。音訓を読み上げるために、読むときに日本人は脳を二カ所使っているという有名な話があつて、仮名読みと漢字読みです。仮名読みの場所と漢字読みの場所は違うもので、『失読』というのどつちかが読めなくなる。」(略)

古井「フランスの哲学者のデリダですか、日本通らしくて、それに気づいたみたいで、『日本語というのは妙な言葉だ。漢字にルビを振っていると日本人は思っている。本当は、仮名に漢字のルビを振っているようなものだ』というのですね。」(略)

「つまり、西洋人は、意味をアルファベットから組み立てているんだけど、アルファベットはそれ自体ニュートラルなものでしょう。そこからまづ単語をつくつて、文章をつくつていくというのは、(略)

言語喪失の谷を渡るようなものです。ところが日本語は、漢字が出れば、相当な意味が一度に開くわけですよ。(略)

「そうすると無言語の谷を渡るという苦労は要らない。」(略)

「日本人はどうなっているかというのと、耳で聞くのは仮名です。それを頭の中で漢字に変換し

て、意味をつないでいく。(略)

しかし、仮名を漢字に変換する構造が脳の中にインプットされているとなると、なかなか外国語は学びにくいですな。(略)

英語の“*α o r p*”だって、僕の頭の中には決して四つの文字として入っていませんよ。漢字が一つ入っているように、“*α o r p*”が入っているんですよ。」

(対談、養老孟司・古井由吉、『日本語と自我』二〇〇二年二月七日、

「群像」二〇〇三年三月号、講談社)

## (一) 序



本稿ではこれまで、我が国の視覚障害者にとって、触読文字としての漢字体系が存在しなかった中で、漢点字が極めて有用な文字体系であることを述べて来ました。

以下、順を追って整理しますと、

### a. 視覚障害者の「点字離れ」

今日、視覚障害者をめぐる一般論として、その〈点字離れ〉が深刻なところに来ていと言われています。音声機器の発達と、音声訳ボランティアの活躍で、音声訳された書物が大量に製作されて、音声訳図書を読書する環境が整って来たり、音声訳書へのニーズが提出されるケースが増大して来ていることが、この〈点字離れ〉に拍車をかけていると言われるのが通論です。

しかし我が国の視覚障害者の置かれている文字の環境を考えますと、カナ体系の〈点字〉だけが、使用できる触読文字であって、一般の標準的な文章である「漢字仮名交じり文」は表すことができないうこと、加えて、一般に行われている識字教育である初等教育での漢字教育に相当する教育は、視覚障害者(児)には、全く施されていないことを考慮すれば、〈点字離れ〉と呼ばれる現象が、単に、ニーズが音声訳へ偏っていることと捉えるだけでよいものか、極めて不十分な見解と思われます。

さらに、現在増加している視覚障害者は、成

人、とりわけ高齢の中途失明者で、その失明の原因も、直接の眼病によるものよりも、全身性の疾患に由来するものが増加していることが挙げられて、触読の機能を開發することに困難を覚える傾向にあると考えられます。

それでも中途失明者の中の生に積極的な方々には、〈点字〉を触読することを困難に感じていても、何とか克服して文字を獲得しようと懸命に努力している姿も少なくないのです。そういう方々からは、やはり〈点字〉に〈漢字〉がないことへの不安と不満の聲が上がっています。

音訳書がどうして〈カナ点字〉の点訳書を凌駕しているように見えるのか、これにはもう一歩踏み込んだ理解が必要と思われれます。

〈音訳〉とは、正しく「訳」で、〈翻訳〉と同様の作業と考えられます。というのは、日本語の「文章」は、文字面からは、「読み」に直結する情報はカナ表記の部分、すなわち助詞・助動詞・送り仮名に限られます。

「文章」を「読む」という運動は、「文章」あるいは「文字」を一旦目から脳に読み込んで、そこで「読み」という音に変換することを意味します。(エピソード参照) 〈翻訳〉とは、ある言語

の語彙や文脈を、他の言語の語彙や文脈に置き換える作業を言いますが、日本語を「読む」という作業も、その意味で、日本語から日本語へという〈翻訳〉でもあるのです。

日本語の「漢字仮名交じり文」のうち、〈漢字〉を音読みする場合は、漢音・呉音の区別はあるにせよ、大体のところさほどの苦勞をせずに〈漢字〉と〈仮名〉の並びに従って読み進めることができますが、〈漢字〉を「訓読」しなければならぬ場合は、「送り仮名」によって、その「読み」が決まってくる。

このことは〈表記法〉という形で約束事になっているのです。「生」という漢字を訓読する場合を例に挙げますと、「生まれる(ウマれる)」、「生きる(イきる)」、「生える(ハえる)」、「生う(オウ)」と表記し、読むことになっています。

例外的に、数は少ないと言っても、「送り仮名」が同じで、「読み」が異なる漢字もあります。

例えば、「行って(イって、オコナって)」「認める(ミトめる、シタタめる)」「来る(ク来る、キタる)」「温める(アタタめる、ヌクめる、ヌルめる)」。

もう一つ、「縁」のように、音読みが「エン」

で訓読みは「ふち」という文字があります。

この「エン」は音であつても、ほとんど訓読に近い用いられ方をしている、日本語の中に深く根を張っている文字です。「縁組み、縁側」のように、いわゆる「重箱読み」と呼ばれる「読み」ですが、むしろ「訓読」と呼んでもよいほどですし、「えにし、よすが、ゆかり」という訓もあつて、これらは一般にカナ書きされはしますが、漢字一文字で表しても間違ひではなく、このように少しずつ意味の異なる読まれ方もします。

これらを総合しますと、如何に日本語の文章を「読む」ことが困難であるかが理解できます。

〈音訳〉は、この作業を「音訳者」が行うもので、文章を一旦音訳者の「脳」に納めて、一定の「読み・リズム・高低・イントネーション」に添つて発音されることを言います。

一般的に話し言葉はこのような約束事に基づいて発語されますし、新聞や週刊誌など、いわゆるステレオ・タイプの文章では、このようにして発音された場合でも、充分理解に耐えうるものです。

これが言わば、〈点字離れ〉の本質と言つてよいものと考えます。

しかし、識字教育を受けられなかつた者にとつては、これら発音の約束事すら知る機会を得なかつた訳で、何れにせよ〈言葉〉については、五里霧中であることに変わりありません。

彼らにとつて音訳書を聴くということは、点訳書を触読するよりも、ただに、フィジカルな負担が大幅に軽くなることで、〈点字離れ〉を起しているものと行く現象として現れているものと、私は考えます

## b. 触読のメカニズム

これまで〈触読〉のメカニズムについては、どのような分析がなされたか、残された資料には、見るべきものがありません。どうしてこのようなことになっているのか、大変不思議に思つていました。

私が本会の活動を始めてから、点字図書館や盲学校を訪ねて、点字について色々とお話を伺つて来ました。その中で、私にとって予想外の結論が見えて来ました。

先ずその前提となるのが、点字図書館や盲学校の運営理念を担っているのが、視覚障害者自身ではなく、その管理に当たっている晴眼者であつた

ことでした。

従って「点字」という文字の捉え方も、晴眼者によつてなされているもので、その場に働く視覚障害者にも、それが大きく陰を落としていることでした。

晴眼者が「点字」を「文字」と捉えたとき、それがどのようなものとして映っていたか、これまでは模糊としたものでしたが、この視点から見ると、大変明快に説明できるように思われます。

曰く、

・『点字』は触読するための文字であるが、文字である以上、一般の文字と同様に読めるはずだ。

・視覚障害者は視覚を失っているのだから、触読の技能を磨くよう努力するのが当然だ。

・『点字』は文字であるから、一般の文字表現も表現できるはずだ。

・視覚障害者にとつて文字と言えるのは『点字』という触読文字なのだから、晴眼者が読み書きするのと同様に、読み書きできなければならぬ。

・晴眼者が享受する文字情報を、視覚障害者も『点字』で享受できなければ、社会参加とは

言えない。

云々

このような言説のもとに、盲学校や点字図書館の中では、晴眼者にとつての文字と、視覚障害者にとつての『点字』は「等価」であるというのが支配的な観念となつて行つたのでした。

しかし、『点字』を触読する者にとつて、この運動が如何に肉体的に負担の大きいものか、如何にそれを訴えることが困難であるか、それが盲学校を離れた視覚障害者が、『点字』からも離れて行く現象として現れているものと、私は考えます。

本稿のタイトルを、『点字の読みづらさと漢点字の触読について』としたのは、このことを踏まえてのことでした。

『点字』の触読のメカニズム、それも「読み」のプロセスは、普通の文字を目で読むものと、基本的には変わりないと考えられます。

すなわち、文字が情報として目から入つて、脳で解釈され、累積され、フィードバックされて蓄積されて、「読み」が経験として積みまされて行きます。『点字』の「読み」も、「目」が「手」に代わるだけで、同様のプロセスを踏むものと考えら

れます。

『点字』は、一八二五年に、盲目のフランス人・ルイ・ブライユが創案したもので、我が国では、一八九〇（明治二十三）年に、石川倉次先生が翻案されたものが公認されて今日に至っています。

ブライユの『点字』の体系は、大変整理されていて、触読に叶っています。

このブライユの『点字』をモデルに、以下に（触読のメカニズム）をまとめてみます。

①点字は六つの点（ $\begin{smallmatrix} \bullet & \bullet & \bullet \\ \bullet & \bullet & \bullet \end{smallmatrix}$ ）で構成されているが、それらの点を触知しながらも、点を認知して読んでいるのではない。

②ブライユの点字は、その構成のうち、上に位置する四つの点（ $\begin{smallmatrix} \bullet & \bullet & \bullet & \bullet \\ \bullet & \bullet & \bullet & \bullet \end{smallmatrix}$ ）から十個の点字符号を作り、それを基本に、下にある点（ $\begin{smallmatrix} \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \end{smallmatrix}$ ）、（ $\begin{smallmatrix} \bullet & \bullet \\ \bullet & \bullet \end{smallmatrix}$ ）、（ $\begin{smallmatrix} \bullet & \bullet & \bullet \\ \bullet & \bullet & \bullet \end{smallmatrix}$ ）を付加することで符号の数を増やしている。最後に一段下げて（ $\begin{smallmatrix} \bullet & \bullet & \bullet & \bullet \\ \bullet & \bullet & \bullet & \bullet \\ \bullet & \bullet & \bullet & \bullet \end{smallmatrix}$ ）の点で、十個の符号を作っている。これによって、先ず上の四つの点でできているか、下の四つの点でできているかを触知し、次いで十の点字符号のうちのどれに当たるか、最後にさらに付加される点の有無を、ほとんど瞬時

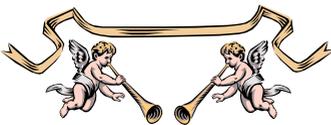
に判定している。

③点字符号を二マス組み合わせ、（ $\begin{smallmatrix} \bullet & \bullet & \bullet & \bullet \\ \bullet & \bullet & \bullet & \bullet \end{smallmatrix}$ ）を単位とするものがある。この（ $\begin{smallmatrix} \bullet & \bullet & \bullet \\ \bullet & \bullet & \bullet \end{smallmatrix}$ ）の三つの点の何れかを使うことによって、前の符号との区切りを付けつつ、後ろの点字符号に対しては前置符号として、符号の数と機能の複合化が図られている。

④点字の触読は、このようにして、点のアル・ナシを触知して判別することに基づいて行われる。

⑤点字の触読に熟達すると、点字のパターンが、像となって脳内に定着する。

（つづく）



漢文のページ

贈劉景文

〔宋〕

蘇軾

荷盡已無擎雨蓋

菊殘猶有傲霜枝

一年好景君須記

正是橙黃橘綠時

荷は尽きて已に雨を撃ぐるの蓋無く  
菊は残して猶お霜に傲るの枝有り  
一年の好景君須らく記すべし  
正に是れ橙黄橘緑の時

蓮の葉はすっかり枯れて、雨にさす傘のような姿はもう見られない。菊は依然として残って、まだ霜にめげぬ枝を張っている。一年のうちの良い光景をあなたはぜひとも覚えておいてほしい。ちようど今のゆずは黄ばみ、みかんはまだ青いこの時を。(作者が五五歳の時、三歳年長の友人に贈った詩。晩年を励ます意が寓されるとされる。)

勸酒  
〔唐〕  
于武陵

勸君金屈卮

滿酌不須辭

花發多風雨

人生足別離

君に勸む金屈卮

滿酌辭するを須いず

花発けば風雨多し

人生別離足る

金屈卮 〓 黄金の取手のついた酒盃。  
不須辭 〓 辞退する必要はない。  
「須」は、「すべからく」で再読するが、

「不須」の場合は、「…ラもちヒズ」と読み再読しない。  
別離足る 〓 足るは、十分にある、多い。

「コノサカヅキヲ受ケテクレ、ドウヅナミナミツガシテオクレ、ハナニアラシノタトエモアルゾ、サヨナラダケガ人生ダ」

(井伏鱒二の訳による。)

※ 大修館書店『漢詩名句辞典』を主に参照しました。





贈 劉 景 文

荷 ハ 盡 キテ 已 ニ 無



ク 撃 グ ルノ 雨 ヲ 蓋



菊 ハ 残 シテ 猶 ホ 有



リ 傲 ルノ 霜 ニ 枝



一 年 ノ 好 景 君 シ 須 ラク



記 ス 正 ニ 是 レ 橙 黄



橘 緑 ノ 時



※「撃」はJIS第1・第2水準以外の漢字です。

勸 酒

勸 ム 君 ニ 金 屈 卮



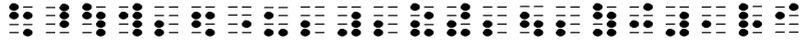
満 酌 不 須 ヒ 辭



スルヲ



花 發 ケ バ 多 シ 風 雨



人 生 足 ル 別 離



## 「」報告と「」案内

### 漢点字講習会について



去る十一月二十四日（月、勤労感謝の日の振替）、トハ：〇から、漢点字講習会の三回目のスクーリングを行いました。

ご都合でご欠席の方もおられました。が、受講者の皆様の、熱心に取り組んでおられる姿に、感銘を受けました。

予定の二時間があつという間に過ぎて、かなり超過してしまいました。



受講の皆様からのご質問にお答えする形で進めましたので、あらましを以下にまとめてみます。

（一）テキストの進め方・テキストの中に、「\*、※、・」などの記号やカッコの類が  
沢山出て来るが、何を表しているのか？

a. テキストの第二回目は、第一回に出て来た文字を部首として組み立てられた文字です。たとえば、「人」と「木」で「休」という字ができませんが、このように二つの部首で出来た文字ばかりではありません。「木」と「目」で「相」という字ができます。この「相」という字にさらに「心」という字が加わって、「想」という字ができます。このように、二つ以上の部首からできる文字は、その中心となる部首、あるいは文字によって、一つのグループを形成します。それを、記号で示しました。「※」は、最も大きなグループ、「・」は、その下のグループというようになっていきます。

また、「\*」は〈注〉、すなわち、直接そこには必要としないが、知識としては大事な要件であることを示しています。

b. カッコの類は、従来のカナ体系の点字では、充分整理されていないこともあって、不慣れなものがあった、というものでした。ご説明でご理解いただけました。

以下に、簡単にご紹介致します。

カ	ギ	カ	ツ	コ
二	重	カ	ギ	カ
ツ	コ	山	カ	ツ
ヒ	ゲ	カ	ツ	コ
小	カ	ツ	コ	

(二) 〈部首〉とは何か? ..漢字の説明の中に、〈部首〉という言葉が出て来るが、それは何を言っているのか?

〈部首〉の説明には、漢字の成り立ちから分類している「六書」の中の、〈形声文字〉をご理解いただかなければなりません。

その〈形声文字〉は、基本的な文字、主に〈象形文字〉や〈指事文字〉をパーツとして、ブロックを積み重ねるようにして作られる文字

です。

第一回目のテキストにある文字は、全て基本的な文字で、それらをパーツとして、沢山の〈形声文字〉が作られます。このパーツになった基本的な文字を、〈部首〉と呼びます。

「この説明の後、点線で表された第一基本文字のうち、三十六文字をモデルに、その字形と、〈部首〉としての働きを例示しながら、ご説明致しました。」

次回のスクーリングは、

一月十八日(日)

12:00からの予定です。

当日は、15:00から、

新年会を行います。

\*漢点字のテキストの第一回分が、テープ版になりました。

また、DAISY用の電子データも作成する予定です。音訳版での勉強をご希望の方は、お申し出下さい。





## EIBRKWJUNSY

この夏から、名古屋・鳥取の漢点字訳ボランティアの皆様を中心に、本会が開発して来た、漢点字変換・編集・印刷用プログラムEIBRKWをご使用いただくようになりました。

このプログラムの優秀性をお認め下さったものと、感謝に耐えません。

EIBRKWは、本会の活動の開始とともに開発を進めて来たもので、“WORD”や一太郎などのワープロ・ソフトで作成されたテキスト・データを、漢点字仮名交りの点字データに変換して、また、点字文のレイアウトを整えるための編集機能を持って、そのデータを、各種点字プリンターやピンディスプレイに送出することができます。

その他、漢点字の電子データである〈EIBFファイル〉を作成したり、ブレイルメモ用のデータ〈BMTファイル〉を作成し、またそれを読み込んで編集したりという、多様な機能を備えています。さらに、KGS社（株）のご提供になる、漢

点字の電子データである〈EIBFファイル〉から、ブレイルメモ用の閲覧専用の〈BMTファイル〉を作成することのできる変換プログラムEIBOBMTが添付されます。これによって、著作権法で許された漢点字の電子データを、読者の皆様にお届けできるようになりました。

現在、日本テレソフト社（株）のご協力をいただいで、同社製の点字プリンターに、漢点字標準装備を目指して、鋭意研究・開発を進めているところです。

**\*EIBRKWJUNSY TEXTがダウンロードできます。**

無料で配布しておりますEIBRKWとTEJUNSYが、名古屋ブレイルネットのホームページから、ダウンロードできるようになりました。ご利用下さい。

URL:

<http://www.n-braille.net/kantenji/eib.html>



## EIBRDIC

『漢字熟語読み方電子辞典』〈EIBRDIC

W)が、CDROMになりました。

EIBRKWとEIBRKRWには、既にEIBRDI CWの機能が装備されていますが、単独に熟語の読みを検索したいとき、EIBRKWを立ち上げなければならぬ、という面倒がありました。

この度、単独に検索できるプログラムが完成し、CDROMでご提供できることになりました。

収録レコード数は、338, 982 (03/12/01現在)です。

初回は六千円、次回から五百円でお分けします。ご希望の方は、お申し出下さい。



## 特定非営利法人(NPO) トータルヒューマンネット21 (THN21) JPNSP

現在NPO法人認可申請の準備を進めております(トータルヒューマンネット21(THN21))の定款に、「視覚障害者の識字と漢点字の普及」を盛り込んでいただくことになりました。

同会は、今回本誌にご執筆いただいた安田章さんを中心に、先ず、知的障害者のグループホームの運営をメインの活動として、身体障害者・知的障害者・精神障害者を対象としたサービスをを行いながら、社会のノーマライゼーションと障害者の社会参加の実現を目標に据えて活動します。

その中で(漢点字)も、「識字」という観点から、「リハビリテーション」という観点からも、同会の理念に合致したものと理解されます。

本会の代表を務めます岡田も、理事の一人として、末席を汚すことになりました。

同会の事務所は、東京都港区に置かれます。また、本会との連携を図る意味で、横浜支部も設けることになりました。

漢点字の活動としては、ボランティアの支援が最も大きな仕事となりますので、本会ばかりでなく、全国の漢点字ボランティアと、視覚障害者の「識字」に関心をお寄せ下さる音訳ボランティアの皆さまへの支援も視野に入れた活動になって行きます。

詳細は次号にて。

ご連絡とお問い合わせは、E-MAIL:

[eib\\_okada@yhb.ne.jp](mailto:eib_okada@yhb.ne.jp)

まで



かなしみの 透りゆくまで 扉を閉ぢよ

胸を閉ぢよと 夜は来たれり

小中英之

小中英之

小中英之

小中英之

かなしみの原因まではこの一首には書かれていません。しかし、今はかなしみに心乱されているのです。そのかなしみに揺り動かされるひとときが過ぎればそれはしんと胸の奥に澄みきってゆくのでしょう。

何故か喜びよりもかなしみの方が心が澄んでゆくようにも思えます。作者はそれを知っています。扉を閉じて胸を閉じて己に籠ることによってかなしみは透きとおってゆくのです。結句の夜は来たれりという表現の中に作者の心の時間も感じられます。

飯わづか<sup>いひ</sup> 食<sup>たう</sup>べて息を乱す老

日に三度見て 三たびを祈る

山本かね子

山本かね子

山本かね子

山本かね子

老いた母上と長い間二人暮らしの作者です。心細やかに寄り添って生きている二人です。高齢ゆえに食の細い母上、ほんの少ししか食べてないのに「息を乱す」姿は痛ましくさえあります。三度三度の食事のたびに作者はその様子を見て、どうぞ健やかな飲食をと祈るのでしょう。

その食によって辛うじて保たれている母上を知っているからなのです。

「三度見て三たびを祈る」という言葉のくり返しが作者の切なる祈りとして読者のくり返しが作者の切なる祈りとして読者の心にこだまのように残ります。

## 編集後記

《表紙絵 岡 稲子》

山本かね子さんの短歌を読んで、いつか来る親(自分自身も)の事とを考えてしまう……。思うが、すぐに来るときは来る、今は楽しく行こう！(単純な私です！)

「羽化の会」も来年は、NPO法人認定許可申請にと動き出しております。

多くの皆様のご支援が頂ければと、微力ながら編集の手伝いをさせて頂き、楽しい一年を過ごさせて頂きました。来年もよろしくお願ひいたします。

皆様よいお年をお迎え下さい。

次回の発行は1月15日です。 宇田川 幸子

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載はかたくお断りします。

# 漢点字 講習用 テキスト

## 初 級 編 第1回 (全10回)

横浜漢点字羽化の会 2003年6月15日

### 第 1 回 (続き)

## 2 基本文字 (2)

### 第一基本文字 (3)

〈第一基本文字 (一マス漢点字)〉の続きを勉強しましょう。

#### (25) 土<sup>⠠</sup> ド ト つち

土を盛った形を象った文字です。もとは神を祀ったヤシロの意でしたが、後に、生産の大本であるツチ、土地の意味になりました。それから、領土、国土の意味にも使われます。部首としても多くの文字に含まれます。

「<sup>⠠</sup>地」 「<sup>⠠</sup>国」 「<sup>⠠</sup>星」 「<sup>⠠</sup>器」 「<sup>⠠</sup>焦」 「<sup>⠠</sup>塊」 「<sup>⠠</sup>工事」 「<sup>⠠</sup>いじり」

#### (26) 手<sup>⠠</sup> シュ て た

人の手を象った文字です。手で何かをするという意味で、「…をする人」という意味にも使われます。部首では主に〈手偏〉として、動作をしたり、働きかけたりの意味を表します。

「<sup>⠠</sup>選」 「<sup>⠠</sup>運転」 「<sup>⠠</sup>断」 「<sup>⠠</sup>術」 「<sup>⠠</sup>紙」 「<sup>⠠</sup>相」 「<sup>⠠</sup>向ける」 「<sup>⠠</sup>折る」



#### (27) 戸<sup>⠠</sup> コ と へ

家の戸口を象った文字です。家、戸口、扉、家の数の単位を表します。部首では、〈戸冠〉あるいは〈戸垂〉となります。

「<sup>⠠</sup>籍」 「<sup>⠠</sup>別訪問」 「<sup>⠠</sup>建て」 「<sup>⠠</sup>口」 「<sup>⠠</sup>井」 「<sup>⠠</sup>惑い」 「<sup>⠠</sup>」

(28) 人 𠤎 ジン ニン ひと

ヒトの姿を象った文字です。部首では、多く〈人偏〉として、ヒトに関わること全般の意味を表します。

「𠤎類」 「𠤎間」 「日 𠤎 𠤎 𠤎」 「𠤎氣」 「𠤎 𠤎 𠤎」 「𠤎出」

(29) 仁 𠤎 ジン ニ ひと

墨字では人偏に漢数字の二の形で、人が互いに認め合い、助け合っていることを表した文字です。漢点字では、二つ目の〈人偏〉として用いられます。

「𠤎王」 「𠤎徳」 「𠤎術」 「𠤎義礼智信」 「巧 𠤎 令色鮮矣 𠤎」



(30) 水 𠤎 スイ みず

ミズの流れる形を象った文字です。部首では〈さんずい〉として、ミズに関わる意味を表します。

「𠤎流」 「𠤎泳」 「𠤎星」 「𠤎道」 「𠤎 𠤎 𠤎」 「𠤎 𠤎 𠤎」 「𠤎 𠤎 𠤎 𠤎」

(31) 氷 𠤎 ヒョウ ヒ こおり こお-る

水が冷えて固まったもの、「こおり」を象った文字です。墨字の部首では〈にすい〉として用いられますが、漢点字では、二つ目の〈さんずい〉として、また〈にすい〉として用いられます。

「𠤎結」 「𠤎点」 「𠤎河」 「𠤎山」 「𠤎柱」 「𠤎 𠤎 𠤎」

(32) 力 𠤎 リキ リョク ちから

腕にチカラを入れた形を象った文字です。一所懸命やる、力を込めて努力するという意味があります。

「入 𠤎」 「動 𠤎」 「𠤎 𠤎 𠤎 𠤎 𠤎 𠤎 𠤎」 「𠤎点」 「𠤎 𠤎 𠤎」



(33) 示 ㇿ シ しめ-す

神様へ捧げ物をする祭壇を象った文字です。部首では〈示偏〉として、神事や祭祀に関わる意味を表します。

「指 ㇿ」 「提 ㇿ」 「教 ㇿ」 「掲 ㇿ板」



(34) 私 ㇿ シ わたくし

ワタクシー人の、個人の、身勝手な、という意味を含んだ文字です。「公」の対語の意味合いを強く含んでいます。漢点字では「ㇿㇿㇿ」の形で、〈ノ木偏〉として用いられます。

「ㇿㇿ事」 「ㇿㇿㇿ」 「ㇿㇿㇿ」 「ㇿㇿ案」 「公ㇿの別」 「ㇿㇿ事」

(35) 走 ㇿ ソウ はし-る

足を早く運んで走る姿を象った文字です。部首では〈そうによう〉として用いられます。

「奔 ㇿ」 「逃 ㇿ」 「競 ㇿ」 「滑 ㇿ」 「小 ㇿり」



(36) 進 ㇿ シン すす-む

墨字では、「しんによう」に「隹（ふるとり）」の形で、先へすすむという意味を表しています。部首の〈しんによう〉は、「すすむ」という動きを表しています。漢点字でも、「ㇿㇿㇿ」の形で、〈しんによう〉として用いられます。

「ㇿㇿ歩」 「ㇿㇿ化論」 「出 ㇿㇿ行」 「行 ㇿㇿㇿ」 「前へㇿㇿめ」

(37) 火 ㇿ カ ひ

火がめらめらと燃えている様子を象った文字です。部首では〈火偏〉として、火や熱や煮炊きに関わる意味を表します。また、文字の下のところに四つの点を配置



した〈烈火〉として、火であぶる形、火を点ける形を表します。漢点字でも「𠄎𠄎𠄎」で〈火偏〉を、「𠄎𠄎𠄎」で〈烈火〉を表します。

「𠄎𠄎星」 「𠄎𠄎災」 「消𠄎𠄎」 「点𠄎𠄎」 「着𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎電」  
「𠄎𠄎の𠄎𠄎」 「𠄎𠄎の用心」



(38) 女𠄎𠄎 ジョ ニョウ おんな め

女性の柔らかな姿を象った文字です。部首では、多く〈女偏〉として女性、やさしさ、柔らかさなどの意味を表します。

「𠄎𠄎性」 「𠄎𠄎𠄎大𠄎𠄎」 「男𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎房」 「𠄎𠄎の𠄎𠄎」

(39) 玉𠄎𠄎 ギョク たま

きれいに磨いた堅い大理石を象った文字とされています。また、価値の高いもの、「ギョク」と読んで接頭語として、相手への尊敬語としたりします。「タマ」と読んで、「まるいもの」「まるく光る宝物」の意味にも用いられます。



「𠄎𠄎座」 「宝𠄎𠄎」 「珠𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎に瑕」

(40) 方𠄎𠄎 ホウ かた

左右に真っ直ぐ伸びる形を象った文字です。「ホウ」と読んで、方向、方法、四角い形の意味を表し、「カタ」と読んで、相手や第三者を婉曲に呼ぶなどの意味に用いられます。

「𠄎𠄎法」 「𠄎𠄎向」 「𠄎𠄎角」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎位」  
「漢𠄎𠄎」 「処𠄎𠄎箋」 「…様𠄎𠄎」



(41) 石𠄎𠄎 セキ シャク コク いし

大きな石を象った文字です。部首としては、硬いもの、壊れないもの、不毛なものの意味を表します。「コク」と読んだ場合は、重さや容積の単位に用いられます。

「𠄎𠄎材」 「岩𠄎𠄎」 「𠄎𠄎仏」 「𠄎𠄎𠄎流」 「磁𠄎𠄎」 「禄高𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎蹴り」

## 近似文字 (4)

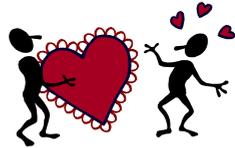
永 ㄩㄣˊ エイ ヨウ なが - い

「氷」の近似文字です。水が曲がりくねって細く長々と流れる様子を象った文字です。時間的にながいことを表します。

「ㄩㄣˊ久」 「ㄩㄣˊ続」 「ㄩㄣˊ遠」

### 読みの練習 (4)

- (1) ㄩㄣˊ州のことをㄩㄣˊㄩㄣˊㄩㄣˊというㄩㄣˊがいます。
- (2) ㄩㄣˊ佐の国はㄩㄣˊㄩㄣˊ国にある。
- (3) 泥ㄩㄣˊにまみれる。
- (4) ㄩㄣˊ芸をするのが趣味です。
- (5) 服の袖にㄩㄣˊを通す。
- (6) ㄩㄣˊ綱を引き締める。
- (7) 春はㄩㄣˊ外に出よう。
- (8) ㄩㄣˊの口にㄩㄣˊを立てられない？
- (9) ㄩㄣˊㄩㄣˊㄩㄣˊは東北地ㄩㄣˊだ。
- (10) ㄩㄣˊ種差別は反対だ。
- (11) ㄩㄣˊ情味がある地ㄩㄣˊです。
- (12) ㄩㄣˊには愛が必要だ。
- (13) 奇特な御ㄩㄣˊじゃ。
- (14) ㄩㄣˊ徳がある支配者だった。
- (15) 薬には蒸留ㄩㄣˊを使うのですか。
- (16) ㄩㄣˊの星は地球です。
- (17) 流ㄩㄣˊを見に行く。
- (18) 外はㄩㄣˊ雨です。
- (19) かきㄩㄣˊは大好きです。
- (20) 液体がㄩㄣˊりつく。



- (21) あの☱がいれば☱☱☱☱だ。
- (22) 勢☱争いをしているボスたち。
- (23) ☱☱☱杯がんばりなさい。
- (24) 選挙の告☱がある。
- (25) 暗☱に弱い我々です。
- (26) ☱向を☱す器☱☱がこれです。
- (27) ここでは☱☱を禁じます。
- (28) ☱立の☱校の月謝は高いですね。
- (29) くるくると☱☱燈が回る。
- (30) ☱り使いをする。
- (31) ☱☱月にはみんな☱級します。
- (32) 後ろ向きに☱む。
- (33) 日☱☱は☱山の国だ。
- (34) ☱をふく鬼とは恐ろしい。
- (35) ☱流作☱を訪問する。
- (36) 源氏物☱に出てくる☱御はたくさんいる。
- (37) ☱☱禁制の島に渡る。
- (38) 長☱の名前をつける。
- (39) ☱の☱を見直した。
- (40) 大原☱が歩いた道。
- (41) こちらは、☱☱混交ですからよろしく。
- (42) この中の小さな☱が☱☱珠ですよ。
- (43) ☱油産出国を考える。
- (44) ☱橋という舞踊がある。
- (45) ☱☱☱☱船が行く。
- (46) ☱☱☱☱をつくすがみつからない。
- (47) 正☱形の折り紙を使う。
- (48) 夕☱と夜明け☱の光の違い。
- (49) ☱のお地藏さん、何見てござる。



- (50) 来劫に渡って続くだろう。  
(51) の眠りにつく。

## 書き取り問題（4）

- (1) よこづなもどひょういりをおぼえる。  
(2) とさけんは、にほんけんだ。  
(3) つちでつくったうつわをしらべる。  
(4) でんどうをしゅうどうにきりかえた。  
(5) そのひから、わたしはてをひいたのです。  
(6) たまくらと、てまくらはおなじことばです。  
(7) いえがなんまんこもある。  
(8) とをあける！  
(9) さんのへ、というまちにいく。  
(10) じんりよくでうごかすくるまは？  
(11) にんぎよひめのはなし  
(12) あんないするひとがいます。  
(13) いは、じんじゅつです。  
(14) すいどうかんが、はれつした。  
(15) みずがなければせいぶつはいきられない。  
(16) やっとすべてが、ひょうかいしました。  
(17) さむいひむろにはいる。  
(18) こおりまくらをつかう。  
(19) みもこころもこおる。  
(20) りきせつしたら、わかってくれた。  
(21) でんりよくぶそくを、かいしょうする。  
(22) ぜんしんのちからをこめる。  
(23) これでは、こどもにしめしがつかない。  
(24) おとなが、もはんをしめす。



(25) してきりゆうようを、していたせいじか。

(26) わたくしのいつものくせです。

(27) どくそうたいせいになる。

(28) おってくるぞ、はやく  
はしれ。

(29) けんこうぞうしんの、たいそう  
をする。

(30) とけいをごふんすすめる。

(31) かちゅうのくりをひろう。

(32) なまものは、ひをとおすこと。

(33) あのを、ようじよに  
しました。

(34) かれこそがにようぼうやく  
です。

(35) せんによのでるすてきな  
はなし。

(36) おんなもおとこもおなじにんげんです。

(37) おとこはめがみさまにやくそくしました。

(38) かってにきんかぎよくじょうにしては  
ならない。

(39) さあ、おてだまをしましょう。

(40) あるちほうとくゆうのことばを、  
ほうげんという。

(41) あなたがたはどこからおいでで？

(42) のじりこで、かせきをはっけんする。

(43) ばんじゃくとは、おおきないしのことです。

(44) かがひやくまんごくのはんしゅ。

(45) いちばんかたいいしは、げんぶがんです。

(46) せんぞのえいたいくようをする。

(47) はかせは、さくねんえいみんされました。

